

5月12日木曜日

発達障害教育論 (講師：笹森 洋樹)

生徒指導について

通常学級では個に応じた支援のみならず、集団の支援も考えその両輪で回していく必要がある。

生徒指導における問題行動

- ・いじめ (中学1年から急増。発見のきっかけは他からの情報提供が多く、校内では発見しにくい。相談相手は担任が多い。発達障害の生徒は相談を自らすることが難しいことも考えておかなければならない。)
- ・不登校 (中学1年生～3年生に圧倒的に多い。授業空白があった生徒たちを高校でどう立て直すかが課題。)
- ・暴力行為 (中学生に圧倒的に多い。近年小学生にも増え、高校生 の件数にせまる勢い。)
- ・虐待 (年々増加し、過去最高件数になっている。)

→ 心のケアと発達に関する課題は・・・担任、生徒指導担当、教育相談担当、養護教諭、スクールカウンセラー、各種専門機関との連携が重要となる。

子どもの理解

子どもの認知特性は多種・多様・・・

動作性知能と言語性知能

視覚優位と聴覚優位

運動処理能力と音声処理能力

同時処理能力と継次処理能力

流動性知能と結晶性知能

全体優位性と局所優位性

メタ認知

自分の思考や行動そのものを対象として客観的に把握し認識すること。自分の認知行動を認知すること。(集団・社会適応が苦手な人に弱さがある。)

障害の有無に関わらず、認知特性の差は誰にでもある。認知の特性によって学び方に違い画出てくる。

従って、大人が当たり前に分かりやすいと思っていることが子どもに受け入れやすいわけではないため、子どもが日常に示す姿から理解し、子どもの立場にたつて教え方を考えていく必要がある。

診断名について

- ・発達障害の特性は障害にわたる特性
- ・重なる特性
- ・変わる診断
- ・状態像は十人十色



子どもの特性をつかむ資料とはなるが、障害名だけを見るのではなく、子ども一人一人の特性を把握することが大切。

「ADHDのAちゃん」ではなくAちゃんはADHDの特性をもっている・・・という考え。

学力アセスメント

○直接的なアセスメント

(・学力検査、知能検査 ・読書力検査 ・視写、聴写テスト ・音読、書字の分析 など)

○間接的なアセスメント

(・行動観察 ・ノート、作文、作品の分析 ・テスト類の誤答分析 など)

まずは、間接的なアセスメントで具体的な様子を把握することが大切。

つまずきのある子ども＝がんばってもできない子ども

→ 根性論だけではなく、頑張り方を考える。頑張っていることに対する評価が必要であり、そのためには子どもの立場にたつて理解していくことが必要不可欠である。